資料1

目次

1　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2　人文・社会科学研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
(1)　人文・社会科学の循環的構造と社会への貢献・・・・・・・・・・・・・・・ 1
(2)　人文学による「想像力の空間」の形成と「人間への寄与」・・・・・・・・・ 2
(3)　人文学から社会への通路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3　言語・文学研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
(1)　言語研究と人間の営み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
(2)　文学研究と人間の営み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
4　言語・文学分野の展望と提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(1)　日本語資料のデータ・ベースの構築・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
①　江戸期以前の日本語典籍のアーカイヴ化 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
②　日本語方言のアーカイヴ化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
(2)　英語教育の方針の確立と日本語教育の充実・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
(3)　日本語教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
①　公共的言語の再生（論理的で普遍的な言葉の必要性）・・・・・・・・・・・ 11
②　日本語非母語定住者のための日本語教育（多文化的社会のゆるやかな統合のために） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
(4)　「複数外国語教育」の復活（人文的教育の衰退への対策の一環として） ・・・ 12

3　言語・文学研究

(1)　言語研究と人間の営み

言語能力は人間固有の能力であり、かつ人間以外の動物には（厳密な意味では）存在しない能力である。従って、言語はまさに「人間の本質」とも言うべき特質の必須部分を占めるものである。

一方、言語は、認識や思考、感情などを表現し伝達する手段であると同時に、人間が自分の認識・思考・感情を自覚的に把握して、更に深めていく時に不可欠な「内面の媒体」でもある。言語のみが内省的な自我の形成を可能にし、その結果、一人の人間を人間たらしめる。

そして、確立された一人の人間（自己）と、別のもう一人の、あるいは別の多くの人間（他者）を繋ぐのもまた言語である。言語は、その言語使用者の間で共通する体系を持ち、それによって伝達を可能にする社会の共有物である。しかし他方、言語は個々人が使用する「ことば」としてのみ現実の中へ姿を現し、それが発せられるその時々の状況の中で、振動し、伸縮し、変化している。従って言語の体系も決して固定的なものではなく、日々の「ことば」の振動、伸縮を受けて、時とともに変化していく。そうした変化こそが言語の特性であって、それによって様々に変動する社会に対応可能な「動的な基盤」として、言語は機能し続ける。

言語研究は、地球上に存在する様々な言語の多様な相を、様々な角度から明らかにしようとする。その根本的意義は、上記のような社会の「動的な基盤」である言語の働きをその動態において解明して、諸言語に普遍の法則を探るとともに、人文諸学をはじめとする、およそ言語を基盤として存立している人間の営み全般に確実な基礎を与えて、その成果に寄与するところにある。

(2)　文学研究と人間の営み

文学作品は、言葉の面からも、表現対象の面からも、対象把握の方法の面からも、自己を制限しない。

言葉には、例えば独白、仲間うちの言葉、公共性を持つ書き言葉・話し言葉等々、様々な相がある。文学作品はそうした様々な相の言葉を自由に選び、その間を自由に行き来し、更にそれらを自由に混在させて、新しい表現力を持った言葉を造る。

文学作品はまた、人間の内面の表層と深層、行動の対自的・対他的局面、その文化的社会的営みの多種多様な相の極細部と全体像、更にそこに潜む最暗部までも、全て表現の対象とする。

そして文学作品がそうした探査を試みるときに頼る手段は、作家の言葉と想像力である。人文諸学や社会科学が厳密な学問的方法と手続きを守って接近する対象についても、文学作品は言葉と想像力だけを頼りに、時として具象的にその様相を描き、時として直感的にその本質を表現して、場合によっては論理を越えて飛躍してでも対象の事柄についての根本的な洞察を提供しようと試みる。

それは、作家の言葉と想像力という鏡（時として歪み、時として批判的な鏡）が映し

だした世界の諸相である。いや、文学作品にあっては言葉と想像力は同じ１つのものの２つの名前で、文学作品は言葉＝想像力を駆使して、世界の諸相を単に映し出すのではなく、むしろそれを造り出す。

その結果、文学研究は特殊な立場に立つ。他の人文諸学の研究の対象は、基本的には世にある事物・実相だが、文学研究は自ら１つの言説でありながら、その対象もまた文学作品という（広義の）言説である。文学研究の基本は、文学作品が言葉＝想像力によって映し出し造り出した仮想の世界の諸相を対象とし、そこに隠された＜意味＞を、解体しつつ再構築していくことである。（言説についての言説である）文学研究が目指すのは、人文・社会科学の諸学が精密な手法によって描きだすべき世界像の、精密ではないが大胆な素描、二重に仮想的な素描であり、その素描が世界の実相の一端を、先取りして示すことである。それによって人々の想像力の空間の中に、人間の実存に関わる風景が立ち上がってくることを、文学研究は期待する。国際的にも国内的にも既存の世界像が大きく揺らいでいる現在、文学研究の果たすべき責務は大きい。

現在、小学校から高等学校までの英語教育はグローバル化に対応する方向に大きく傾いている。一方で先に述べた「それが通用する国・地域の文化を負荷された言語としての」英語の教育についても、明確な方針を示すべきである。この種の英語教育を大学教育に委ねるのも一策と考えられる。

(3) 日本語教育

① 公共的言語の再生（論理的で普遍的な言葉の必要性）

日本の初等中等教育、高等教育における日本語と日本語教育の理念を、根本的に改めることを提案する。

言語は決して表層的なコミュニケーション手段ではなく、認識・思考・感情の「内面の媒体」である。その「内面の媒体」である言語を（自然的に獲得した母語を土台としつつも）論理的で普遍的な「公共的言語」（書き言葉／話し言葉）へと育てることが、公教育の「言語教育」の目標でなければならない。

日本語教育についてまず必要なのは、「美しい日本語」という幻を追ったり、「日本語の乱れ」を憂えたりする情緒的議論ではなく、日々グローバル化・国際化が進む中で、現在の日本語の弱点は何か、そして今後日本語はどうあるべきかを冷静に問い、明らかにすることである。

言語は３つの相を持ち、その三者が動的な「循環的スペクトラム」を構成している。すなわち、私的空間（＝相互了解圏）内において通用する「私的話し言葉」、他者が存在する公共的な空間を前提とし、そこでの相互の理解と交流のために使用される「書き言葉」、更に公共的な場での直接的な意見の交換を可能にする「公共的話し言葉」である。この三者は循環して、言語の力を活性化する。

だが、いま日本語の現状を考えれば、その循環のうちでも「私的話し言葉」の相対的豊かさに比べて、論理に耐えうる「公共的言語」（書き言葉／話し言葉）の衰退が著しい。そのことは例えば日々報じられる政治や行政の場における言語、またそれを報じるジャーナリズム自体の言語の貧しさを見れば、明らかである。平均的「公共的言語」の水準は、そのままその社会の、知を耕し育て発信する力を示す。それは人文・社会科学にとってはもちろん、自然科学と科学技術にとっても、その営みを支える基盤である。現状をこのまま放置しては、グローバル化社会における日本の、科学新領域への構想力、技術革新力、そして文化発信力は、極めて覚束ないことになる。それは、国際共通語化しつつある英語ができるできない以前の問題である。

② 日本語非母語定住者のための日本語教育（多文化的社会のゆるやかな統合のために）

日本語を母語としない定住者およびその子弟のための日本語教育を、教育対象者個人のためのサービスとしてではなく、将来にわたる日本社会の（ゆるやかな）統合性と安定性維持のための社会的必要と捉えて、そのための施策の責任と費用、特にその

分野についての研究推進の責任と費用を、国が積極的に負担することを提案する。

現在既に日本語を母語としない多くの人々が、仕事を持ち、日本経済の不可欠な部分を担って日本に定住している。更にその子弟で、幼時より日本に育ち、両親の言語と日本語の両者を不安定な状態で母語とする子供たちの数も増大しつつある。こうした傾向はグローバル化の趨勢の中で、その時々の消長はあれ、今後も更に進むことが予想される。しかし同じような事態が先行した西欧諸国に例を見れば、それが社会を分裂させ、不安定にする危険を孕むことも見逃すことはできない。急速に多文化的になりつつある日本の社会をゆるやかに統合して、豊かで安定した場所として維持していくためには、様々な固有の文化や言語への敬意とは別に、日本語が社会を束ねる共通の言語として広く機能し続けることが必要不可欠である。他文化圏出身で、日本語の教育を受ける充分な機会を得られず、社会的上昇を目指すための前提なしに疎外されたまま日本社会に暮らしつづける若者の数が増えていく恐れがある。それは彼ら個人の不幸に止まらず、日本に於ける日本語の社会統合力の衰えを意味し、社会全体を確実に不幸、不安定にする。

日本語非母語定住者とその子弟への日本語教育は、既に外国人への行政サービスの域を越えて、国家と社会の将来のための政策課題となっている。この分野の教育は、今まで志ある人々の善意と熱意によって支えられる部分が大きかった感があるが、今後はそれに加えて国の意識的積極的な関与と負担が必須である。

(4) 「複数外国語教育」の復活（人文的教育の衰退への対策の一環として）

初等中等教育・高等教育における人文的教育の再編強化の一環として、過去のいわゆる第２語学教育への根本的反省の上に、大学に於ける「複数外国語教育」制度の復活を提案する。

上掲２-(２)で略述したように、人間の営み全ての根源・基礎・目的には、単なる生存に満足できずに「生の意味」を求める人間の「実存性」が深く関わっている。その自覚を呼び起こし、それによって心に「想像力の空間」と「他者への通路」を開くことが、次世代の教育全ての基底にあるべきであり、それを担うのが「人文的教育」である。

明治以降、「人文的教育」は初等中等教育においては「修身」「国語」「漢文」が、更に旧制高校段階においては、１)主としてドイツ古典哲学に依拠した教養主義的教育、２)古典的テキストを題材とした西欧諸語の集中的教育、の両者がそれを担っていた。

1945 年の日本の敗戦後、上記のうち「修身」「漢文」は廃止されて、近代主義的な文学教育へと重点をシフトさせた「国語」と、人倫主義的な「修身」に代わった世俗主義的な「道徳」とがそれらに代わった。また旧制高校の後身の大学教養課程では、近代科学の一分肢としての人文諸科目と、実質的授業時間が大幅に減った第２語学とが、その後を埋めた。

こうした変化の背後に日本国家主義への反省と新しい市民的理想の胎動があったことは、確かである。しかしながら、その後の経緯をみれば、日本社会の高度成長と教育の大衆化の中で、初等中等教育はいざ知らず、少なくとも大学においては、その理想が

形骸化して行ったこともまた否めない。受験勉強を経た学生たちの目には教養課程の人文諸科目の授業は高校授業の退屈な繰り返しと映り、また第２語学は、英語の世界的覇権が確立されていく中で、言語の本格的習得に必要な時間数を決して配分されないまま、言語の文化性と実用性の間に立ち迷うばかりで、大半の学生にとっては単位さえ取得できればあとはもう忘れていい無用の授業となって行った。

90年代初頭の、いわゆる大学教育カリキュラムの大綱化とその結果としての戦後の教養教育システムの崩壊は、その意味で１つの必然ではあった。しかしそれによって大学の教育は実用主義的方向へ大きく偏って、「人文教育」は更に衰退した。人間の「実存性」の自覚と、心の内部に「想像力の空間」と「他者への通路」を育てることは、国際化、グローバル化の進む現代世界で全ての人々に望まれる基本的心性（＝教養）である。にもかかわらず、そうした心性を養うべき「人文的教育」がほとんど崩壊しているに近い大学教育の現状は、日本の将来を深層において危険に晒している。その再建は今日の急務である。

我々は以上の状況への対応策の一環として、（かつての第２語学では授業担当者の個人的努力と識見の範囲内に止まっていた）大学における「人文的教育」としての「複数外国語教育」の重要性を強調したい。人間の「内面の媒体」である言語の学習は、たとえ極めて初歩の段階に止まった場合でも、その文化圏の人々の「心と社会」への魅力あふれる「覗き窓」となりうるのである。

もちろん、今や世界共通語となりつつある英語の教育は重要である。だが、それが世界共通語として強い力を持てばこそ、大学におけるこの種の英語（「言語に結合する文化的負荷を極端に軽減した」英語）だけの単独外国語教育には、次のような問題がある。1）言語における実用面のみが重視され、言語の「内面の媒体」性が無視される恐れが強くある。2）またたとえ後者その面が付随的には学ばれたとしても、それは当然英米文化に色濃く染められていて、他外国語による相対化なしには、若い世代の異文化への関心を（現実にも圧倒的に存在感を持つ）とりわけアメリカ文化へ向けて、世界の文化的多様性への視線を妨げる危険が大きい。例えば、隣国の言語である中国語や韓国語への関心も英語のそれに比べればなお微々たるものであり、隣国の若者が日本語や日本文化に寄せる関心の度合いとは比較にならない。

若い世代の中に人間の内面の文化的多様性、そして世界の不均等さと多彩さへの関心を呼び起こすためにも、「人文的教育」としての複数外国語の学習が、重要かつ有効である。

以上、我々が前掲の提案をする所以である。